

異文化から見た日本のジェンダー―主として留学生の面接調査より―

桜田 千采 松下美知子 島 弘子 小西 光子

I . 問題と目的

日本で学ぶ留学生が文化の違いを大きく感じるものの一つに、日本社会に存在する男女の違い、すなわちジェンダーがあげられる。これまでになされたジェンダーに関する研究では、性による役割期待の違いとその認知の発達、親子・異性など様々な人間関係のなかのジェンダーの様相、学校教育をはじめとする諸領域で見られるジェンダーなどが主要なテーマであったが、いずれも日本人のみを対象としたものであった。

そうした中で、岩男・荻原（1988）は、日本社会の男女平等感について、日本人学生と留学生との認知のズレを明らかにし、また女子留学生の経験する、女性であるが故のカルチャー・ショックを取り上げた吉岡（1997）の研究は、留学生を対象としたジェンダーの研究であった。

現在日本社会に存在するジェンダーは、日本人にとって、日本社会で成長したが故に、あえて吟味・検討されることもなく、当然のこととして受け止められている場合が少なくない。しかし、日本以外の国々の基準から見ると、日本社会に存在するある種のジェンダーは、性の固定化や明らかな差別と認知され、留学生にカルチャー・ショックを与えている。

国際比較の際、社会の中での女性の位置を示す指標として多く用いられるものとして、HDI（人間開発指数）とGEM（ジェンダー・エンパワーメント測定）があり、日本の測定値を見ると前者は世界174カ国中4位と高水準にあるものの、女性の社会参画状況を示すGEMは102カ国中38位に留まり、日本は両者のギャップが大きい国である（1999 UNDP「人間開発報告書」）。このような日本の状況のなかで、留学生、とりわけ女子留学生には、戸惑いや驚き、さらには日本社会のジェンダーに不満を訴える者もいる。本研究では、留学生から見た日本社会のジェンダーを明らかにすることにより、ジェンダーに対する日本人との認識の違いを明らかにする。さらにそれに基づいて、日本社会におけるジェンダー・バイアスや性による差別の是正や関係性改善に向け、理論的根拠となる基礎的資料の収集と作成を目指す。

従って、本研究の具体的な目的は以下の3点である。

1 . 留学生自身のジェンダー意識・ジェンダー観を明らかにする

2. 留学生がとらえた、日本人のジェンダー意識・ジェンダー観を明らかにする
3. 日本人学生自身のジェンダー意識・ジェンダー観と上記1および2を比較し、それぞれの差異を検討する

II. 手続き

- ・対 象 国立大学に在籍中の留学生47名・日本人学生52名。その内訳は表1の通りである。

表1 面接者のプロフィール

	日本人学生 (52)		外国人学生 (47)	
	男子 (41)	女子 (11)	男子 (21)	女子 (26)
平均年齢	22.1歳	22.5歳	26.7歳	25.0歳
専 門	理系 41	理系 11	理系15 文系 6	理系11 文系15
結婚の有無	未婚 41	未婚 11	未婚15 既婚 6	未婚19 既婚 7
身 分	学部生 41	学部生 11	学部生 9 研究生 2 大学院生 9 教員研修生 1	学部生 12 研究生 6 大学院生 6 教員研修生 2
家族の職業	会社員 16 公務員 14 自営業 10 自由業 1 その他(農業1) 2	会社員 8 公務員 2 自営業 1 その他 1	大学教師 3 教師 2 会社員 6 公務員 3 自営業 5 自由業 3 その他 7	大学教師 3 教師 6 公務員 4 会社員 9 自営業 3 自由業 6 その他 11
家族構成				
祖父母同居	17	2	1	
父母	41	11	16	19
兄弟	37	16	16(兄嫁2 甥姪2)	17
妻・夫・子			6	4

留学生47名 (21歳~42歳) 内訳

男性21名

中国 8 ・ 韓国 5 ・ マレーシア 5 ・ アルメニア 1 ・ デンマーク 1 ・ アイルランド 1

女性26名

中国11 ・ 韓国 1 ・ マレーシア 2 ・ ミャンマー 1 ・ タイ 1 ・ ポーランド 1 ・ ウクライナ 1 ・ ラトビア 1 ・ ロシア 2 ・ ブルガリア 2 ・ オーストラリア 3

- ・ 方 法 留学生に対しては、ジェンダーに関する半構造化された個別面接を実施。使用言語はすべて日本語であった。
調査の内容は、「家庭の中の役割分担」「家庭における決定権」「女／男だからしなければならない／してはいけない、と家族に言われたこと」「女／男でよかった／つまらないと思った経験」等である。
また、日本人学生には、留学生に実施した面接の内容とほぼ同じものを質問紙により実施した。
さらに必要に応じて、日本人学生・留学生の討論の場を設定し、面接で語られた内容の確認を行った。
- ・ 調査実施期間 1999.12月～2000. 2月迄
留学生に対する面接調査は、すべて個別面接であり、平均して30分程度要し、テープレコーダによる記録を併用した。なお、面接記録は一字一句書き写され、後日留学生にフィードバックされた。面接を担当したのは日本語教師であり、留学生との間には十分なラポールが形成されていた。

Ⅲ．結果と考察

留学生・日本人学生の反応（面接および質問紙への回答）の一例を表に示し、以下順に面接や質問紙の内容毎に明らかになった事柄,およびその検討を行うこととする。

1．家庭における役割分担と決定権

留学生の面接調査と日本人学生の質問紙への回答を整理したものを表2に示す。

表2 ①役割分担

	日本人学生 (52)			外国人学生 (47)		
	男子 (41)	女子 (11)	計 /%	男子 (21)	女子 (26)	計 /%
食事の支度は誰がするか						
母+妻	36	10	46/88.5	14+ 4	16+ 5	39/83.0
父+夫**	0	0	0 / 0	4 + 2	9 + 4	19/40.4
子供*	0	3	3/5.8	3	6	9/19.5
他の家族	4	1	5/9.6	3 (兄嫁2)	2	5/10.6
不定	3	0	3/5.8	1	3	4/8.5
複数回答	5	3	8/15.4	9	17	26/55.3

(食事の仕度以外の家事は誰がするか)						
母+妻	32	9	41/78.8	12+4	13+3	32/68.1
父+夫**	1	2	3/5.8	9+3	6+3	21/44.7
子供	2	4	6/11.5	4	5	9/19.5
他の家族	5	1	6/11.5	(兄嫁) 2	2	4/8.5
不定	8	2	10/19.2	3	7	10/21.3
みんなで	0	0	0/0	0	2	2/3.8
複数回答	8	4	12/23.0	13	16	29/61.7
家計を支えるのは誰か						
母+妻**	16	2	18/34.6	10+1	13+3	27/57.4
父+夫	35	11	46/88.4	15+4	18+3	40/85.1
他の家族	0	0	0/0	0	2	2/3.8
子供	0	0	0/0	3	3	6/12.8
不定	0	0	0/0	0	1	1/2.1
複数回答	15	2	17/32.7	13	17	30/63.8
収入ある仕事をするのは誰か						
母+妻**	23	6	29/55.8	12+2	20+3	37/78.7
父+夫	36	11	47/90.3	15+4	18+3	40/85.1
子供	1	1	2/3.8	5	8	13/27.7
他の家族	0	0	0/0	4	1	5/10.6
不定	2	1	3/5.8	0	0	0/0
複数回答	21	6	27/51.9	16	24	40/85.1
子供のしつけをするのは誰か						
母+妻**	26	7	33/63.5	17+2	23+1	43/91.5
父+夫**	14	6	20/38.5	13+2	16+1	32/68.0
子供	0	0	0/0	0	1	1/2.1
他の家族	3	1	4/7.7	1	2	3/6.4
不定	13	4	17/32.7	0	0	0/0
複数回答	15	6	21/40.4	14	17	31/66.0

注1) **は、日本人学生と外国人学生の間での χ^2 検定1%で有意

2) *は、 " " " 5%で有意

3) の部分は、 χ^2 検定5%で有意

②決定権ー誰が決めるか

	日本人学生 (52)			外国人学生 (47)		
	男子 (41)	女子 (11)	計 /%	男子 (21)	女子 (26)	計 /%
親戚の付合い						
母+妻**	8	2	10/19.2	8+3	14+2	27/57.4
父+夫	19	9	28/53.8	10+3	12+2	27/57.4
子供	0	0	0/0	1	0	0/0
他の家族	4	0	4/7.7	1	0	1/1.9
みんなで	0	0	0/0	1	5	6/12.8
不定**	13	1	14/26.9	1	1	2/4.3
本人	0	0	0/0	1	1	2/4.3
複数回答**	5	2	7/13.5	9	11	20/42.6
大きな支出						
母+妻**	7	2	9/17.3	12+3	14+1	30/63.8
父+夫	22	8	30/57.7	13+3	18+1	35/74.5
子供	0	0	0/0	1	2	3/6.4
他の家族	1	1	2/3.8	0	0	0/0
みんなで	0	0	0/0	1	4	5/10.6
不定**	8	1	9/17.3	0	0	0/0
本人	4	1	5/9.6	0	2	2/4.3
複数回答**	3	2	5/9.6	13	17	30/63.8
子供の教育						
母+妻**	14	3	17/32.7	15+3	16	34/72.3
父+夫**	9	7	16/30.8	14+3	18	35/74.5
子供	1	0	1/1.9	1	0	1/1.9
不定**	14	3	17/32.7	0	1	1/1.9
本人**	4	1	5/9.6	7	14	21/44.7
複数回答**	4	3	7/13.5	15	16	31/66.0
家族各人の行動						
母+妻**	4	1	5/9.6	9+3	10+1	23/49.0
父+夫**	6	4	10/19.2	11+2	11+1	25/53.2
不定	21	1	22/42.3	1	9	10/21.3
本人	13	6	19/36.5	12	19	31/66.0
複数回答	1	13	14/26.9	1	12	13/27.7

注1) **は、日本人学生と外国人学生の間での χ^2 検定1%で有意

2) の部分は、 χ^2 検定1%で有意

「食事の支度」「(食事以外の) その他の家事」の項目において、日本人学生・留学生ともに母親が多く担っている傾向は共通であるが、日本人の場合には、父親が全く関わっていないか、関わっているとしても極僅かであることが分かる。留学生の家庭の場合、父親は普段は家事をしないものの、来客などの特別な場合には腕を振うなどの例が語られている。日本の家庭における母親への家事の集中化傾向については、留学生・日本人学生を問わず女子学生が敏感に反応し、特に女子留学生は26名中24名が、日本でホームステイ時に観察した様子を報告している。「母親だけ夕食の支度・準備、後片付け。娘もしたが、父親は何もせず晩酌して酒の肴を要求している」(中国)など、日本社会に多く存在する性別役割分業について、具体的に語っている。日本人女子学生の自由記述欄にも性別役割分業への疑問が女子留学生と同様に認められる。「料理だけでなく家事全般を上手にこなすことが女であるための必須条件という考え方が、無意識のうちに当たり前のように存在している」という意見がその典型である。また、男子留学生は21名中14名がこのことについて言及しているが、具体的な観察というよりもやや観念的な報告が多い。「結婚した女の人が(外で)仕事をしているのは少ない」(中国)「夫は仕事だけ、妻は家事だけ」(中国)、「高学歴の女性が結婚すると家庭にはいつてしまうのは勿体ない」(中国)などの意見である。

なお、留学生や日本人女子学生のこうした意見と対照的であったのは日本人男子学生の「料理の出来ない恋人とは、将来を考えて別れようと思う」という発言(於；日本人学生と留学生の討論の場)であり、性別役割分業が強く内面化されていることを示している。

母親に家事が集中する一方で日本の家庭の場合には、「親戚付き合い」「大きな支出」等に関して父親に決定権が見られ、「家族各人の行動(の決定権)」では、特に誰も決まっていない(不定)とする回答が最も多かった。留学生の面接に見られるように、様々な「決定権」に関して、父親・母親がともに分かち合っていることは対照的である。「母が父に『どうでしょうか?』と聞く」(ブルガリア女子)、「(自国では)結婚したら家庭内のことは2人で相談して決めるが、日本の家庭では父親が全部決めていた。日本人の25才の男性が『父親が怖い』と言っていたのでびっくりした」(ラトビア女子)など、家庭での決定権が男性にあり、男性中心に家庭が営まれているという印象が報告されている。(47名中38名、中国・韓国・ミャンマー・タイ・ポーランド・ウクライナ・マレーシア・ラトビア・ブルガリア・オーストラリア・デンマーク・アイルランド・ロシア)その理由について男子留学生は「日本の家庭では専業主婦が多く、それが家事の負担が女性に重い原因であり、経済力も無いから、決定権も男性主導なのだろう」(中国)と面接時には分析して語っている。

また、「家族各人の行動（家族一人一人の行動を決めるのは誰か）」においても、日本人学生の決定には両親の関与が低く「本人」もしくは「不定」が高率であるが、留学生の場合には、両親が関与する率が50%前後と高い。さらに、面接時の発言から、留学生が幼い時には両親が、成長してからは本人（66.0%）へとその決定権が移っていることが明らかにされた。

このような家庭の中の役割分担と決定権の2側面から、次のことが指摘できる。

日本の父親は、家庭生活の場での存在感や家族の中での役割が小さく、日本の社会に根強く存在する性別役割分業（男性は外、女性は内）の図式通りあることが、日本人学生・留学生の観察により明らかにされた。しかしながら、現在の日本の学生の目に映る家庭での父親像がこのようなものであることは、若い世代の人々にとって将来のモデルとしての影響を与える点で問題となる。一方それに対して留学生の家庭では、決定事項は夫婦や家族全体の話し合いで決めており、家庭内の役割についても、複数が分担しているとの回答が多い。つまり、家庭内のことには家族全員が関わって為し遂げていることを示している。「(日本は) 家庭全体として人間関係が希薄」という捉え方をする留学生も47名中22名(中国・韓国・マレーシア・ミャンマー・欧米)と少なくない。「老人や病人に関心が薄い。兄弟や親子の関係も薄い」「食後の団らんなど家族が一緒に時間が少ない」「子供が大学生になると家を離れ、長期休暇にも帰らない」等々。なお、留学生は自国での経験を基準として日本の家族について言及している訳で、これと比較する日本人学生のデータは当然無い。日本人学生の家庭では、家事は殆どが母親一人に集中し、父親をはじめ他の家族も分担しようとする姿勢が見えない。この点が日本の家庭の大きな特徴と言える。

2. 日本人学生および留学生自身のジェンダー意識・ジェンダー観

留学生に実施した面接において多く語られた内容や、日本社会のジェンダーとの差異が大きいと複数の日本人が判断したものを中心に、日本人学生への質問紙とともに検討を行った。

(1) 「女」/「男」だからしてはいけない・しなければいけないと言われた例

この回想法により、日本人学生・留学生がジェンダーについてこれ迄どのような教育を受けてきたのか、それが現在の彼らの中にどのように定着しているかを把握した。

男子留学生が家庭のなかで責任ある地位・立場あるいは男性の役割分担として果たすべきことを教育されているのとは対照的に、日本人男子学生はいわゆる男性性を強調されてはいるものの、具体的な役割分担上の責任については教育される事が無い。「けんかに負けるな」「泣くな」など、男らしさの強制が18例に対し、役割分担に相当

するのが「家を継げ」と言われた1例のみである。

また、日本人女子学生は全員が何らかの性役割分担や性差別的なことを言われたり強制されたりした経験——「女は短大で充分」（進学・就職4例）「本を読むなら家事をしろ」（家事の強制9例）「一人旅の禁止」および「研究室の来客接待の強要」（計20例）「言葉遣い・行儀・礼儀作法」（7例）——を持つが、日本人男子学生、留学生にはそうした経験を持たない者も見られる。日本人女子学生を除く、こうした経験の無い学生たちの理由は、留学生と日本人男子学生で大きく違う。留学生たちの中で経験が無かったのは、「男女は平等だから」「家族の中が平等だったから」「社会が（平等）になっているから」（中国・ロシア・ブルガリア・オーストラリア）ということに基づくが、それは日本人男子学生の「覚えていない」とは大きく異なるものである。

今回の調査の対象となった留学生は、いわゆる男女共同参画が進んだ西欧先進国の出身者があまり多くなかったためか、「女だから」という理由で強制や規制を受けたという女子留学生の例は、日本人女子学生よりむしろ数も多く内容も様々であった。特に礼儀作法を喧しく言われたと言う例——「大声で笑いながら話すことの禁止」「歩き方を優雅に」等——は様々に指摘されていた（中国・韓国・マレーシア・ミャンマー等）。この調査項目から分かることは、日本人女子学生は性別役割分担も性差別もしっかりと教育または伝えられており、彼女たちがそれを強く意識する結果となっている。一方で、日本人男子学生が、男子留学生に見られたような「責任」についての教育がなく、ただ「男性は特別である」とする優位性のみ持たされて、その背景をなすジェンダー・バイアスの不合理について深く追求していないという対比が見られる。

また女子留学生は、日常的な細かいチェックを受けてきた者が大勢いる一方で、全くと言って良い程そうした事を経験せず男女の対等性を考えている者もいるが、後者の考え方には出身国の社会体制の違いの影響が認められる。さらに、男子留学生に特徴的であったのは、男性優位で家庭の中における役割分担の教育を受けつつも、同時に経済的な責任や家族を保護する責任について教育されていることである（中国・韓国・マレーシア）。その他、アジア漢字圏からの男子留学生が家庭内の男女の役割について言われて来なかった理由に、「家が貧乏だったから」と述べたが、家中で働かざるを得ない状況においては、女性の仕事／男性の仕事と区別するゆとりが無いのは当然である。個人の意見に影響する経済的な条件を考慮に入れた検討は常に必要であろう。

(2) 「女」「男」で良かった／つまらないと思った経験

日本人学生・留学生のジェンダー意識・ジェンダー観への回答を見る限り、日本人女子学生は全体的に「よかった」と思うことが少なく、その内容も表面的で、「女性で

あること」の精神的な満足感を得ているとは言い難い。「生理的に保護される」「いろいろな洋服が着られる」「精神的に甘えたり、許されたりする」などがその理由である。一方で、女子留学生の場合は、「よかった」とする回答が多くその内容も様々である。例えば、「母親の手助けが出来るから」「男性は人生の成功を仕事の成功だけでしか測れないが、女性の場合は家庭の幸せ、育児、仕事とすべてが人生の幸せに通じ、男性よりも成功の幅が広い」「仕事と育児の両立は辛いと思ったが、男性より幸せ」と、女性である事の意味について追求し、満足感を得ている。その反面、性差別・性役割分担を受け入れはするものの、逆にそれを利用する女子留学生もいた。「男性は経済的に家族を養う責任があるから大変」「女性は仕事ができなくてもいい(許される)」「(自分でやらなくても)男性を使えばいいから」などという意見に代表されるものであるが、女子留学生自身の意見というよりも彼女たちの周囲の女性の考え方を反映している面もある(ブルガリア・中国・マレーシア等)。男子学生の側からそれと対応するものとして、「(男性で)つまらない」理由には、「女性は社会的責任を負わない」「女性は口先で煽るだけで、男性は辛い」などの意見が見られた(日本・中国)。これらの意見をそのまま放置せず、さらにその背景となる枠組みを探り、両性相互の検討を通すことにより、ジェンダー・バイヤス解消への契機となるものと思われる。

また、男子留学生の場合には、出身国での強い女性差別(例えば「女性だったら、日本に留学できなかったらう」等)の現状(韓国)から、「男子でよかった」と感じている者が多いが、日本人男子学生も同様に、女性に対する社会的圧力と比較してそう感じている。日本人・留学生共に、男子学生には「(男で)つまらない」とする回答は全体では少なく(それぞれ41名中5名・21名中4名)、現状に満足している。

女子留学生の「(女で)つまらない」理由には、「政治の中心になれない」や「内乱の激しい所は危険だから行くのを止められた」などの例、また男子留学生の「(男で)よかった」理由として、「仕事や研究で責任を持たされた」や「責任を持って行動できるから」など、自己の社会的な側面に言及したものが挙げられている。これに対し、日本人学生の回答には、僅かに女子学生の、「男性と同じように活動できないから(女でつまらない)」という回答に社会との関わりを見るのみであった。

3. 留学生が捉えた日本人のジェンダー意識・ジェンダー観及び日本人学生の持つジェンダー意識・ジェンダー観との比較

ここで取り上げたジェンダーについては、留学生・日本人学生ともに日本社会全体で気付いた男女間の格差または差別と感じられるものが中心となっている。ただし、家庭の領域に関する質問は、留学生のみを対象としたものである。

(1)留学生は、日本の家庭全体として人間関係が希薄と捉えている。

日本の家庭を訪問したり、ホームステイをするなどの経験を通して留学生が指摘したのは、次の事柄である。すなわち、家族の間が冷たくバラバラで会話が少なく、父親は仕事は熱心だが家庭のなかでは存在感が薄い、母親ばかりに家事を負担させて他の家族もおかしいとも感じない、等、アジアを中心に家族関係の希薄さを指摘する例が多かった（中国・韓国・マレーシア等）。日本の家庭に見られる性別役割分業の図式とそこから派生する家族間の問題について、出身国と比較して多くの留学生が言及していた。

(2)日本では家庭内に男女差別があると留学生は捉えている。

留学生の疑問や驚き、関心は家庭内での男女の関係性に集中しており、自国での家庭生活と最も大きな相違を感じていた。特に女子留学生は「ホームステイした時、おばあちゃんもお父さんも子供もいたのに、お母さん一人で家事をしていた。一人で作って最後に食べる。他の家族は先に食べている。お母さんかわいそう」「友達の家で大勢で食事をした時、男の人がテーブルに付き、女の人が離れた所で食事をしたので私はテーブルにつけなかった」などの具体的な描写で自分の経験を語っており、強く印象付けられたことが分かる。他にも、「女の子は食事の支度を手伝うが、男の子は手伝わない」などの意見があった。女子留学生ほど具体的ではないが、男子留学生も日本家庭における性別役割分業に対する認識を持っている。「父親はいつも命令していて、母親は家庭の顔」「結婚すると、妻は家事だけ、夫は仕事だけ」などというものであった。

(3)日本社会における男女差別の存在とその内容の指摘。

女子留学生は特に社会における男女差別全体に敏感に反応しており、職業の格差・職場での格差に疑問を持っている。「女性が会社等でお茶くみをしている」（中国・タイ）「(女性は) 社会での地位も低い・重要な仕事を任せられない」（中国）「子供が産まれたら会社を辞めるように言われる、自分の問題なのに」「教授などは男性が多く、秘書などは女性が多い」（中国）等々。

また、男子留学生が出身国では当然である、食事の後片付けをアルバイト先でしたところ、「やさしい」と日本人の女性から褒められて戸惑っている経験を述べた。男子留学生の指摘の中にも、職業がどちらか一方の性に片寄っているもの、例えば、レジ・サービス業は女性、大学教師は男性などおかしいとするもの（中国）もあった。

(4)職場、職業に関する男女間格差。

留学生よりもむしろ日本人学生が強い関心を持っており、とりわけ大多数の女子学

生が就職時の男女雇用機会の不均等を挙げていた。男子学生の中にも真面目にある特定の地域に残る公務員の定年の男女差，国会議員の産休問題に関心を寄せているものも見られた。

しかしその一方で，日本ではエスコートされないこと・デートの時に女性も勘定を持つことに驚いた女子留学生や，女性のみが優遇されるレディースデイ，研究室の教授やアルバイト先の店長に女子学生がやさしくされることなどを取り上げて，「男性に対する差別」と見なす日本人男子学生（11例）など，ジェンダーに対する認識が混乱している学生は日本人・留学生双方に見られる。

また，就職や職場での差別については身近な問題であるため，日本人学生が最も熱心に差別を訴えている問題である。留学生は在日期间が短く，日本および出身国で一般社会に触れた経験が少ない等の理由から，この問題に言及するものは日本人学生に比べて少ない。

(5)教育の場での男女差。

男女別の教科がある。スポーツの試合に女子が出場できないものがある。大学の寮が男女で分かれている。大学祭の仕事で女子学生が出来ないもの（夜警など）がある。（以上の指摘はオーストラリア 5 例，日本 1 例）

日本社会は幼少時から明確な理由なく男女別々のグルーピングをしてきた事が，日本人学生の意識に強固に組み込まれており，性差ではなく個人を単位とする国からの留学生とは意見を大きく異にする。ジェンダー・フリーの教育を志向するわが国にとっては，既にジェンダーからの解放の点でリードをとる国からの留学生の意見は貴重である。

(6)態度・様子・考え方における男女差。

男女間での会話と同性同士の会話の様子や態度を比較して観察していると，男性・女性の違いが見えてくる。男女で会話をしている時には，男性はだんだんと尊大にそして女性は言葉遣いも丁寧になる。同性同士の会話ではそのようなことは観察されない。一般に，日本の女性は下を向いて歩き，男性は肩を張って歩く。女子学生はいつも「可愛い」にしている（発言のママ）。女性はいつも他人の考えを気にしている。一方で，男子学生は自立的。男子は良く発言するが，女子はあまりしない。男子学生は暗いが女子学生は元気がいい（以上 中国 7 例・マレーシア 1 例・ブルガリア 2 例・オーストラリア 2 例・計12例）。これらの発言は，留学生のようにそれぞれの自国との比較する基準のない日本人の観察では見えて来ない。日本人の無意識的にとる態度

や行動にも男女差が顕れており、留学生の眼を通すとその「奇妙さ」が捉えられる。個人が何気なくとる態度や行動、思考の中に顕れるジェンダーの影響を読み取ることができるのは、異文化の視点を通してであろう。

(7)その他；男女差を感じない・分からない

留学生 5 例（マレーシア 2 例・ポーランド 1 例・ロシア 1 例）、日本人学生 2 例。

その理由として挙がっているのは、直接に男女差を感じる場面にあったことがないと言う学生が多かった。渡日後半年程では、日本社会のジェンダーについての事柄を感じる事が出来ないということであろう。

以上、質問紙・個別面接による結果について、(1)～(7)を指摘した。全体としては、ジェンダーの解消にとって、以下の点が重要と考える。

家庭の領域では日本に存在する強固な役割分担の見直しである。日本では家事は母親に集中する、いわゆる性別役割分業が広く認められるが、留学生の家庭では母親が家事の主たる担当者ではあるものの、家族全員が家事を分担している様子が明らかにされている。日本のように母親一人に特定されてることはない。また一方で、家庭での様々な決定権が日本では父親に集中しており、家族みんなで相談することが少ない。これに対して留学生の家庭においては、家族の話し合いがあり、家族全体が良く接触し、親密である。従って、留学生は日本の家庭は冷たく、親子関係も希薄であると感じている。日本人学生は留学生と比較して、男女差を感じる場合も、自分が不利である経験をしなないと分からず、それを生み出している社会制度等にまで関心が向かない。日本人学生の社会参加意識の希薄さは昨今指摘される通りであるが、それがジェンダーの領域においても見られたということであろう。

今後は、身近な家庭内の役割・就労時の差別化や態度等における性差を点検すると共にそれらの根底にあるジェンダーの問題への気付きとその解消を図る具体的な方法の確立を模索することになるであろう。日本人以外の視点を導入し比較することによって、日本社会に存在するジェンダーの問題は、より明確かつ具体的に把握することが出来た。これらの基礎的なデータの収集を基に、日本社会に存在するジェンダーの解消に向けた対策を講じて行くことが今後の課題である。

【参考文献】

- ・岩男寿美子 萩原 滋 日本で学ぶ留学生 頸草書房 1988
- ・桜田千采 松下美知子 島弘子 小西光子 外国人留学生の受入れに関する研究 VII

異文化間教育学会第22回大会発表抄録 2001

・吉岡美千子 在日女子留学生の異文化における問題とジェンダー

異文化間教育学会第18回大会発表抄録 1997

The gender issue in Japan, from the foreign cultural point of view

T.Sakurada, M.Matsushita, H.Shima and M.Konishi

ABSTRACT

The gender issue in Japanese society is one of the largest cultural gaps for international student studies in Japan. Theme of this study is to identify what is the gender issue in Japanese society for international student, then clarify the cognitive difference of gender from Japanese.

In National University, international students from 14 different countries, 21 males and 26 females, 47 in total (at age 21 to 42) and Japanese students, 41 males and 11 females, 52 in total (at age 21 to 22) were subjected to study. Semi-structured questions were asked in Japanese to international students on interview session and the questionnaires were collected from Japanese students. Research period was from December 1999 to February 2000.

As a result, several gender-related issues were specified in following situation.

- (1) High consciousness of the gender roll in Japanese family and discrimination against female
- (2) The actual condition of gender bias in profession and workplace
- (3) Gender felt in educational scene
- (4) Gender in attitude, manner and the way of thinking and others

By introducing the different viewpoint from Japanese, the gender issue existing in Japanese society could be understood more clearly and specifically. To discuss the activity for Gender-free condition with these basic informatoin is the task in next step.